

行田税務署管内納税貯蓄組合連合会長賞 銅賞

税金と公共の支えについて

学校法人開智学園開智未来中学校

三年 村木 俊次郎

僕はかつて、救急車で病院へ搬送された経験がある。体調が急変し、家族が通報をしてくれた。救急隊員の方々は迅速かつ冷静に対応し、僕の状態を確認しながら病院へと運んでくれた。そのとき私は不安でいっぱいだったが、彼らの声かけの処置に、自然と安心感が生まれたことを覚えている。

この出来事の後、私は救急車を利用したのに費用がかからなかったのはなぜかと疑問に思った。調べてみると、日本では救急車の出動費用は利用者が直接払うのではなく、税金によってまかなわれていることがわかりました。一回の出動にかかる費用は平均して約五万円と言われており、それをすべて税金で賄っているという事実に大きな驚きを感じた。税金というと、これまではなんとなくとられているものといった印象を持っていた。しかし、自分が実際にその恩恵を受けた経験を通じて、税金は私たち一人ひとりの命や生活を守る支え合いの仕組みなのだという実感を得た。救急車だけでなく、警察、消防、公共の医療、教育など、私たちが日々当然のように利用している多くのサービスは、税金によって成り立っている。一方で、安易な救急車の利用が問題となっている現実も知った。軽度の症状で出動要請が増え、

本当に命に関わる人への対応が遅れる事例があるという。税金で支えられているからこそ、その使い道は慎重でなければならない。私も利用したからこそ、必要性和責任の重みを強く感じている。

この経験を通して、僕は税金に対する考え方が大きく変わった。税とは単なる義務ではなく、見えない誰かを支える手段である。今後、私が社会の一員として働くようになれば、自分の納める税金がいつか誰かの命を救うことになるかもしれない。そう考えると、税金という存在がより身近で、意味のあるものに思えてくる。救急車に僕がのつたあの日、僕は命を守られた。そしてその裏側には、多くの人の善意と支えがあった。そのことを忘れずに生きることが、私にとって大きな責任であると感じている。今の私にできることは、安易に救急車を利用しないことや、税金の使われ方に関心を持ち続けることかもしれない。しかし将来、社会に出て働く立場になった時には、納める税金を通じて社会に出て働く立場になったときには、納める税金を通じて社会を支える側に回ることができる。さらにその先には、税金のあり方や公共サービスの仕組みについて、自らが考え、声をあげる責任も生じるだろう。救急車を利用した経験は、単なる個人的な思い出に留まらず、私に社会の一員としてどう生きるかという課題を与えてくれた。公共の仕組みを当然と思わず、常に感謝と自覚を持ちながら、自分もまた誰かの支えとなれるよう努力していきたいです。